

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

## 1. 研究課題

「システム内存在としての世界についてのアートを媒介とする文理融合的研究」

Research in a 'Totally Systematized World': Media-Art, Humanities, and Natural Science

## 2. 研究代表者氏名

三輪眞弘

Masahiro MIWA

## 3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(3年目)

## 4. 研究目的

現在、われわれ人類は人為的エネルギーに支えられた高度テクノロジーの只中で生きており、一見「自然」や「環境」や「心」と見えるものすら、システムなしに存立し得ない状況に至っている。本研究はこの認識から出発する。そして生命や心さえ含む地上の全存在が巨大システムに組み込まれていくこの時代の相貌につき、「サイバネティクス」

「テクノロジー」「メディア」「情報学」を切り口とし、芸術創造に携わる申請者が媒介となることで人文学系と自然科学系の知見の総合をはかり、学知の認識を紙媒体だけでなくビデオアートや音楽作品の制作という感性的次元において発信する可能性を探る。これが本研究の目的である。つまり本研究は ①全人類的な問題についてのアートを媒介とする文理融合研究の実践モデルを示し、かつ ②学知を感性メディアを通してより直接的に社会へと接続しようとするものである。なお「システム」についての申請者の考えについては『三輪眞弘音楽藝術 全思考 一九九八～二〇一〇』（アルテスパブリッシング、2010年）を参照されたい。

We are now living in a totally systemized, high-technology world which is completely dependent on electrical energy, and even things that we regard as 'Nature' or the 'Environment' or the 'Human Spirit' could not continue to exist without this system. In this project, characteristics of the contemporary world will be researched in terms of cybernetics, technology, media and information theory. The overall purpose of this research is to synthesize knowledge of both natural science as well as the humanities, and to create media-based art works inspired by this research.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度の5回の研究会のうち4回は、予定出版社アルテスパブリッシングの編集者にも参加してもらい、書籍媒体による成果まとめのための最終報告にあてた。キーとなるテーマは「配信芸術」であり、ライブによる芸術行為が電気メディアを介在することでなお同一のものたりうるのか、ありうるとしたらどの側面においてか、あるいは別のものが生まれる可能性はあるのかという議論が焦点になった。具体的には「ライブが生命のメタファーでありつづけてきたこと」、「ライブはすでにテレビの登場以来電気メディアと一体になっていたこと」、「パフォーマンス行為におけるスピリチュアリティの問題を真剣にとらえること」が議論の中心となった。研究会においてはいずれも、芸術学および科学史および思想の研究者、実験科学者、AI技術者、そしてアート実践者による、「バイオ」と「メディア」をキーワードとして、専門の枠を超えた学知融合の場を提供できたと考える。

## 6. 本年度の研究実施内容

- 2021-04-24 切腹・沈没・大予言——1970年と1973年を中心に 発表者 片山杜秀  
2021-07-11 「配信芸術論」を考える 発表者 岡田暁生  
2021-09-12 配信芸術論と霊性 亡霊的機械としての映画 発表者 佐近田展康  
2021-09-12 同上 配信者の使命 発表者 佐藤淳二  
2021-11-13 配信芸術の考古学 テレビからメディアアートへ 発表者 松井茂  
2021-11-13 同上 受信観察論 発表者 瀬戸口明久  
2022-03-12 生命＝ライブとしての音楽 「音楽＝生命」をめぐって 発表者 岩崎秀雄  
2022-03-12 同上 二分心崩壊以後・シンギュラリティ以前 発表者 山崎雅史

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

本研究班では「配信芸術は芸術たりうるか」が議論の中心の一つであり、その思考実験／実践の一環として、班員である岩崎秀雄（生物学者・バイオアーティスト）が五輪文化イベントの一環として「配信を禁じられた無観客展示」と題したバイオアート作品

(<https://hideo-iwasaki.com/culturing-opapercut>)を創作公開した。また班員の松井茂は配信芸術の前身としてのテレビを論じた『虚像培養芸術論 アートとテレビジョンの想像力』を出版した。なお2020年度の成果である岡田暁生『音楽の危機』（中公新書）に対して2021年度に小林秀雄賞および京都府文化功労章がおくられた。

## 8. 研究班員

所内

岡田暁生、瀬戸口明久、佐藤淳二、藤井俊之、上尾真道

学外

三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、松井茂(情報科学芸術大学院大学)、伊村靖子(情報科学芸術大学院大学)、佐近田展康(名古屋学芸大学)、岩崎秀雄(早稲田大学)、山崎雅史

(株式会社NTTデータセキスイシステムズ)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	4			1		16			4	
国立大学											
公立大学	2	4					16				
私立大学	1	1					4				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関	1	1					4				
外国機関											
その他 ※											
計	6	10 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	40 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		1	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
現代生命哲学研究	1	R3. 11	時間軸の代謝：「人工細胞と人工知能の慰霊」について	岩崎秀雄
Circadian Rhythms in Bacteria and Microbiomes,	1	R3. 6	“A retrospective: on disproving the transcription-translation feedback loop model in cyanobacteria”	Hideo Iwasaki
『アートと地域の協働をキュレーションする』（富山大学芸術文化学部、2022年）	1	R3. 12	「方法詩の実践と社会との関わりについて」	松井茂

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

上述のように本研究班は、書籍媒体による成果公開のため、実質的に来年度も継続することになる。書籍形式による成果まとめは「配信芸術」をキーワードとし、斬新な音楽書籍で知られるアルテスパブリッシングからの出版を予定している。また本研究班の主要目的は、人文学の最先端の議論にアート実践にかかわる人々に触れてもらい、書籍媒体ではなく作品創作による人文学の社会発信の新しい形式を模索する点にあり、2022年9月18日 サラマンカホール「ぎふ未来音楽展」において、ライブ形式と配信を融合した音楽作品の発表が予定されている。またサントリーホールにおいても2023年に二回の班長三輪の「配信芸術」の理念に基づくコンサートが行われる予定である。さらに2021年9月にサラマンカホールで行われ、サントリー音楽賞を受賞するなど大きな反響を呼んだオンラインパフォーマンスが、5月28日 - 6月19日、The Terminal KYOTOにおけるファルマコン展「新生への捧げもの」において、再度上映される予定になっている。